

都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー (4) オユンゲレル

サラングレル

児玉香菜子

本テキストは小学校教師であったオユンゲレル¹さんのオーラルヒストリー (写真) である。オユンゲレルさんは 2021 年 2 月に北京に来て、中央民族大学で教員をしている末娘ゴワー夫婦の家で旧正月を過ごしていた。約束した日にゴワーさん夫婦の自宅を訪問すると、痩せて色白で、真っ黒な髪の毛の美しいモンゴル人の婦人が笑顔で迎えてくれた。オユンゲレルさんの出身は内蒙古自治区 (以下、内モンゴル) ヒンガン² (興安) 盟³ホルチン (科尔沁) 右翼前旗チャラスン (察尔森) 鎮⁴ボロホジョー村である。オユンゲレルさんの職業はホルチン右翼前旗チャラスン小学校教師で、2008 年に定年退職している。オユンゲレルさんの家族は皆、先祖代々民間の芸能一家で、ウリゲルチ⁵やホールチ⁶であった。オユンゲレルさんの父は有名なホールチで、父方のおじたちもまたホールチかウリゲルチだったという。オユンゲレルさん自身もホーリン・ウリゲル⁷に興味があったため、毎日ホーリン・ウリゲルを聞いていたという。

オユンゲレルさんはすでに 70 歳だったが、足腰はまっすぐで、健康的で、かつ聡明で、話は巧みで論理的だった。さらに、長く教師をしてきた人の風格で、活力がみなぎっていた。娘夫婦も一緒に質問し、家じゅう楽しく打ち解けた雰囲気のもとでの聞き取りとなった。

オユンゲレルさんは教師の気風と責任感があると同時に、勇気ある、でも平凡な母である。オユンゲレルさんは苦しい生活のなかでも弱気にならず努力し、3 人の子どもを育てあげ、教育を受けさせ、「馬の鞍をなでることができ、あぶみに足をかけることができた」⁸だけではない。今は孫たちの世話を面倒だと思わず、むしろ幸福なことだと考え、「今、わたしは幸せです」と何度も話していた。オユンゲレルさんの生活史は一人の個人的な歴史ではなく、社会の歴史、一時代の知識人の生活、過酷な

¹ サラングレルが聞き取りを行い、モンゴル文字に書き起こし、それを児玉が日本語に翻訳した。

² 本テキストのモンゴル語表記はホルチン方言に準ずる。

³ 盟は内モンゴル自治区の行政区画。自治区と旗の中間に位置する。旗は内モンゴル自治区での行政区の名で、中国の行政単位の県 (县) に相当する。

⁴ 鎮は中国の行政区の名。県の下に位する行政単位。郷とソムに相当する。ソムは内モンゴル自治区の行政区の名。

⁵ ウリゲルチ (ulgerchi) とは、ウリゲルの吟唱者をいう。ウリゲル (ulger) とは、主に、内モンゴル東部地域に伝わる中国の歴代王朝の物語、モンゴルの英雄叙事詩、伝説、叙事民謡などの口承伝承を指す (スチンバト 2011 : 77)。

⁶ ホールチ (huurchi) とは、四胡を低音で弾きながらウリゲルを演唱する芸能者をいう (スチンバト 2011 : 77)。

⁷ 四胡を低音で弾きながら演唱されるウリゲルのこと (スチンバト 2011 : 77)。

⁸ 立派に子どもを育て上げた、の意。

生活経験である。1960年代の食事は共同食堂から分け与えられる粥とトウモロコシ粉で作ったボーブ（パン、蒸しパン）だけであった。しかも、そのボーブは小麦粉にトウモロコシの切り株と皮を混ぜて粉にしたものである。1970年代のオユンゲレルさんの月収はわずか30、40元だった。中国の今の若い人たちがこれを聞いたら、おとぎ話に出てくる話と思うであろう。この生活史は、モンゴル地域の社会、文化のある困難な歴史であるとともに、国家の現代史でもある。



写真 オユンゲレルさん（2020年撮影）

—ご自身の先祖についてよくご存じですか。祖父母から上の世代についてどれくらい分かりますか。ご自身の歴史、故郷、幼いころの珍しいこと、きょうだい親戚、仕事、子どもについてすべて話してくださいませんか。自由に話してください。

わたしは祖父母より上の代についてはあまりよく分かりません。分かることを話します。

わたしは辰年で、1952年生まれです。今年（2021年）70歳です。出身は今のヒンガン盟ホルチン右翼前旗です。前旗は内モンゴルの東北部、大興安嶺の南麓にあるので、「前旗」と言ってよいです。清代に前旗はホルチン六旗の一つでした。ホルチン六旗とはホルチン右旗前旗、中旗、後旗、ホルチン左翼前旗、中旗、後旗の6つを言います。ホルチン右翼三旗はジャサグド、トシャード、グン旗と言いました。本来、前旗はジャサグド旗と言いました。ホルチン右翼三旗は民国時代のある期間、黒龍江省に属していました。のちに、ヒンガン盟に入りました。その後、1967年に吉林省に属しました

9. 1979年に再度ヒンガン盟になりました。以前、ジャサグド旗の中心はオラーンホト（烏蘭浩特）でした。

わたしは前旗のチャラスン鎮¹⁰ボロホショーガチャ¹¹に生まれました。チャラスン鎮はオラーンホトから北東に15キロ余り離れたところにあります。トール川がチャラスン鎮の北から南へと流れています。チャラスン鎮にはあわせて15のガチャがあります。モンゴル人はだいたい鎮全体の人口の60パーセントを占めています。本来、チャラスン鎮はトシャード旗とグン旗の中心でした。のちに、オラーンホトに移りました。今、旗の中心はホルチン鎮です。

チャラスンというのは木の名前です。故郷にチャラスンというクヌギの木がたくさんあったので木の名前を鎮の名前にしました。わたしの故郷では草木の名前にちなんで地名を付けることが多いです。

父方の祖父の名前はデルジェーと言います。祖母の名前はボラグと言います。父の家系にはホーリン・ウリゲルを話す、ホールチンが多いです。父とその兄弟5人とも皆ホーリン・ウリゲルを話し、四胡を弾きます。父は三男です。父には2人の兄と2人の弟がいます。父の名前はモルトと言ひ、人びとは皆父をモルト・ホールチと呼んでいました。一番上のおじはハンジンシューと言ひ、こぼなしを上手に話していたそうです。二番目のおじの名前はシャンホーと言ひます。四番目のおじの名前はオーラと言ひ、一番下のおじはハダと言ひます。5人皆農民でした。しかし、芸能面で才能がありました。父と一番上のおじはホーリン・ウリゲルを上手に話していたものです。

父にはまた3人の姉がいたと言ひますが、わたしは会ったことがありません。父の3人の姉たちは黒龍江省の江東にいるときに嫁に行きました。父の姉たちの子どもたちとは後に連絡をとりあっています。関係はよいです。

母方の祖父母は今の黒龍江省のデルブト旗（杜爾伯特蒙古族自治県）にいました。そこは農業地域です。祖母は1898年生まれでした。1978年に80歳で亡くなりました。母はトンガラグという名前です。母の干支は壬戌年です。義父の干支もまた壬戌年でした。1922年生まれでした。わたしの末娘であるゴワーは彼女の母方の祖母と父方の祖父がちょうど61歳の時に生まれました。

わたしの母は幼いときから孤児でした。母の父は早くに亡くなり、母の母が別の人と再婚したため、母は孤児となり、母の父の妹の下で育ったそうです。母は17歳のときに結婚しました。おば¹²、つま

⁹ 吉林省に属したのは正しくは1969年から。

¹⁰ ホルチン右翼前旗の下位行政区分には9つの鎮、1つの郷、1つの民族郷と3つのソムがある（2010年から）。鎮はホルチン（科爾沁）鎮、ソロン（索倫）鎮、デブス（德伯斯）鎮、ジュールヘン（居力很）鎮、チャラスン鎮、エルゲト（額爾格図）鎮、归流河鎮、大石寨鎮、俄体鎮。郷はバルガステイ（巴日嘎斯台）郷で、民族郷はマンジュツン（満族屯）満族郷。ソムはオラーンモド（烏蘭毛都）ソム、アルダル（阿力得爾）ソム、トホム（桃合木）ソムである。

¹¹ ガチャは内モンゴル自治区の行政区画単位で、村に相当する。

¹² 原典はアニヤー（aniya）。アニヤーは母の姉か妹、つまり母方のおばを言う。母方のおばを「ナガチ・エージ（nagachi eeji）」、「ナガ・エージ（naga eeji）」、「ナガチ・エゲチ（nagachi egechi）」と呼ぶところもある。中国語の「姨娘（yiniang）」から「イーニャン（iniyang）」とモンゴル語にして呼ぶところ

り母の姉ソブドと母の姉妹2人はワンという姓の兄弟2人とそれぞれ結婚し、一つの家に暮らしていました。ワンという姓の兄弟は故郷でホワンという姓の金持ちの家で働いていました。わたしの2人の兄が生まれたとき、強盗たち¹³がホワンという姓の金持ちの家に来て、2人の兄の父を捕まえて

「なんていう姓だ」

と聞いたので、

「ワンという姓です」

と答えたにもかかわらず、

「ホワンという姓だ」

と聞き間違えて、2人の兄の父を殺してしまいました。しかし、母の姉であるアニャーの夫は殺されませんでした。生き残った母とアニャーとその夫と数人で夜中に一緒に逃げ出しました。逃げて、ボロホショーというところに来ました。この2人の兄のおば、つまり父の妹がボロホショーに嫁に行っていたので、頼って来たそうです。

ボロホショーにやってきて、わたしの母はわたしの父と再婚しました。父の姓はハン（韓）で、わたしはハン・オユンゲレルと言います。実父は幼い時から孤児でとても貧しかったそうです。12歳でハンという姓の家に仕事に行っていました。土地改革¹⁴の際に、雇農出身に決まりました。当時、出身を決める時に、雇農、貧農、小貧農、中農、富農、地主といくつかの階級に分けていました。雇農民というのは一番貧しい階級です。財産が何もなく貧しく、他人の家で働いていた人たちです。父は雇農でした。

一番上の兄が5歳、二番目の兄が3歳の時に母は父と結婚しました。母は再婚してから三番目の兄、わたし、弟の3人を産みました。つまり、わたしには3人の兄と1人の弟がいて、わたしは一人娘です。わたしたち5人きょうだいは1人の母から生まれましたが、2人の父がいます。しかし、2人の兄は幼い時からわたしの父を「父さん」と呼んでいます。わたしの父も普段から分け隔てなく自分の子どものように育てました。皆一つの家族で仲良く育ちました。どんなもめごとでもありませんでした。わたしたちの子どもたちもよい関係でいます。わたしの2人の大きい兄は違う姓で、ワンという姓です。一番下の兄とわたしと弟の3人はハンという姓です。しかし、わたしたち5人は同じように仲が良いです。

わたしたち5人きょうだいは皆チャラスン中学校を卒業しました。チャラスン中学校の創立は1956年です。

わたしの一番上の兄の名前はワン・シュンと言ひ、1941年生まれで、巳年です。中学校を卒業後、

もある。

¹³ 原文では「ホンフーズ (hong huuz)」で、これは強盗を指す方言。「紅胡子 (honghuzi)」という中国語を音訳して読んだもの。「胡子」には髭という意味の外に、馬賊、匪賊の意味がある。

¹⁴ 土地改革についてはフスレ (2011) に詳しい。

オラーンホトの医学校で勉強していました。しかし、1966年になるとその医学校が無くなりました。そのため、実家に帰ってきて農民をしていました。1979年に民間の医師になりました。兄は片足が病気になる、その足を切断しました。足の血管が詰まる病気でした。今は片足だけになり不便なので、医者をやめました。しかし、たくさんの方が来て兄に治してもらっています。田舎の民間の医師です。兄嫁はラオ・ヤと言ひ、1949年生まれで、丑年です。2人には5人の子供がいます。

二番目の兄の名前はダ・ダンと言ひ、1944年生まれで、申年です。兄嫁はシュワ・シャンと言ひ、同じく申年です。2番目の兄は1963年に中学校を卒業し、実家に帰ってきて働いていましたが、1964年にマンジョーリ（満州里）市の国境軍に入りました。1970年に軍隊から戻り、オラーンホトの財経局の市場管理事務室で働いていました。当時、兄嫁には仕事がありませんでした。そのため、黒竜江省の国営農場に異動し、兄嫁に仕事を見つけてきました。2人はともにホルチン右翼前期大石寨鎮の食糧局で働き、今は退職しています。数年前に兄は亡くなりました。5人の娘がいます。

三番目の兄はゲレルトと言ひ、1949年生まれで、丑年です。中学校を卒業後、チャラスンの林業管理所で働いていました。後に、旗の林業局で働くようになり、今は退職しています。兄嫁はジン・リエン（金連）と言ひます。1952年生まれで、辰年です。三番目の兄は2013年に肝臓が腫れる病気になり亡くなりました。3人の子供がいます。

弟の名前はジョロムトと言ひ、1957年生まれで、酉年です。弟はまずチャラスン中学校を卒業し、1979年にヒンガン師範学校に入り、2年勉強して卒業しました。ボロホショー小学校で教師をしていました。弟は40歳過ぎの時に脳腫瘍になり、2000年に亡くなりました。当時、給料は期日より遅れて支払われます。そのため、お金が足りず、治療できずに亡くなりました。嫁はドイ・ショーと言ひ、1959年に生まれで、亥年で、農民です。3人の子供がいます。

1960年代に合作化し、共同食堂で食べるようになりました。当時、3種類の食堂がありました。仕事をしている人たちの食堂（労働食堂）、高齢の人たちの食堂（老年食堂）と学生の食堂（学生食堂）という3つです。食堂の食事は主に粥とトウモロコシ粉で作ったポーブ（パン、蒸しパン）です。このポーブは小麦粉にトウモロコシの切り株と皮を混ぜて粉にした食べる術がないものでした。しかし、他に食べるものが無いので、食べざるを得ませんでした。家族ごとに1人が食堂に行き、1たらいの粥、家族人数分のトウモロコシ粉で作ったポーブをもらってきます。父が病気だったので、兄たちが家にいないときはわたしが食事をもらってきたこともありましたが。一度、わたしはドアのところであまり寝て転び、もらってきた、たらいに入った粥をこぼしてしまい、ポーブだけしか食べる物が無いときもありました。母は怒ったけれども、わたしをたたきませんでした。

父は幼い時から他人の家で働いてまわり、貧しい生活をしてきたので、肺の病気になりました。そのため、父は54歳で病気になり、おそらく1962年に63歳で亡くなりました。わたしが10歳の時です。父は病気だったのに、食事でも悪く、栄養が足りず、さらに治療もできず、それで亡くなりました。

母は1998年に亡くなりました。

わたしはボロホショー・ソムの小学校で学びました。1961年に入学し、1966年に小学校を卒業しました。勉強はよくできました。そのため、チャラスンの中学校を受験して入学しました。しかし、1966年に文化大革命がはじまり、あまり学ぶことができず、半分仕事、半分勉強で、3年で卒業しました。1968年に卒業証明書をくれました。何も勉強できませんでした。1969年から労働に参加しました。わたしたちは故郷に帰って来た知識青年、北京と上海から地方にやって来た下放知識青年と呼ばれました。1971年にボロホショーガチャの婦女連合会¹⁵の主任になりました。この仕事を1975年までしました。

夫¹⁶の名前はヘシグトと言います。1952年生まれです。辰年です。アラドチラル（中国語で民主）生産大隊フフチョロート生産隊（バルガータ）のフフチョロート村第八生産小隊出身です。わたしたち2人は同級生でした。夫は1年生から4年生までフフチョロート小学校で勉強しました。5年生から6年生までボロホショーに来て学びました。そのときからわたしたちは同級生です。チャラスン中学校でも同級生でした。卒業時に18歳で、実家に戻りました。義父の姓はチュルグートです。ジンフー（金虎）という名前です。義父はわたしを嫁にしようと手を尽くし、わたしのお婆のソブドを仲人にして、わたしたち2人を結婚させたのです。義父は1999年に亡くなりました。

当時、嫁をもらうときに婿側は嫁側に四種の神器を用意します。四種の神器とは自転車、腕時計、ミシンとラジオを言いました。婿側はわたしに衣服数着と自転車1台を買ってくれました。結婚式の際に、わたしは自分の給料で腕時計を買いました。また、わたしの故郷では結婚をするときに、嫁の側から婿の父とその兄弟たちにブーツを縫って送る習慣があります。当時わたしは婿の側に7、8足のブーツを縫いました。購入していた人もいたように思います。自分の枕も自分で縫います。自分のブーツもまた自分で縫ってもってきました。このブーツを早く履きつづいた人は早く幸福な生活を送るといいます。そのため、わたしは早く履きつづそうと思って、たくさん履いてすぐに捨てました。しかし、今ようやく幸せな生活を送っています。嫁入りをするとき、青色で装うと言います。義両親

¹⁵ 各民族各階層の婦人を団結し、各種の建設事業に参加し、婦人の権益と児童の福利を守り、婦人の思想・能力の向上、男女平等とともに夫人を徹底的に解放することを目的とする。

¹⁶ 聞き取りではオユンゲレルさんは終始自分の夫のことを「ゴワーの父」と呼んでいた。ゴワーはオユンゲレルさんの末娘で、聞き取りにゴワーさんも同席している。モンゴル人は夫を「家の主人」とし直接名前を呼ぶのを忌避する慣習がある。家の主人を名前で呼ぶ、もしくは「チー（chii、目下に使う二人称、おまえの意）」と呼ぶと、運気を下げると言い、忌避する慣習がある地域もある。そのため、モンゴル人はいつも夫婦で直接名前を呼びあわず、何か別の名前に呼び変えるか、あだ名で呼ぶようにしている。そのため、子どもたちはかなり大きくなるまで、自分の両親の本当の名前を知らず、周りの人たちが両親を呼ぶ名前や両親が互いに呼び合う名前を覚えたものである。他の人に対しても、妻は夫のことを「わたしの人」、「子どもの父さん」もしくは子どもの名前ですと例えばオユンゲレルさんのように「ゴワーの父さん」というように呼ぶものである。夫が妻を語る際には、「家のひと」、「子どもの母さん」というように呼ぶ。本稿では「夫」に統一している。

を元気にし、繁栄させる、実家も元気にし、繁栄させると青色の服で装います。ブーツもまた青色で、花の刺繍が縫ってあるブーツを履きます。結婚式にはたくさんの慣習がありました。上の世代では婿の帽子を奪います。婿に服を着せるときに、嫁側の親戚友人たちが婿のブーツを隠し、騒ぎに起こしていました。しかし、わたしたちが結婚式をあげた時にはそのような慣習をすることはできないことになっていました。

結婚式後、わたしたちは別々の場所で働いていました。夫は旗の中心で仕事をしていて、1985年にようやくチャラスン獣医所に移ってきて、所長をしていました。わたしはフフチョロートとボロホシヨーで13年仕事をし、1988年にチャラスン鎮に来ました。わたしたち2人はおそらく10年間、離れ離れに生活していました。

夫は1975年に吉林省農業大学に入学しました。当時、大学に行くには試験ではなく、人民公社と生産大隊の推薦が必要でした。これは「人民公社から来て、人民公社に帰る¹⁷、工農兵大学生」と言います。夫は獣医を学びました。そして、1977年に大学を卒業して戻ってきて、試験を受けて、ダムジン前旗牧畜局に就職しました。当時、前旗の行政の中心はオランホトにありました。わたしたちは1978年1月1日に結婚しました。当時、わたしもまたチエンジン（中国語で前進）生産隊の工作隊¹⁸から地方の牧畜地域に派遣されて仕事をしていたので、結婚のために3日間の休暇を取り、結婚式をあげ、3日で仕事に戻りました。当時、わたしは共産党員だったので、普段は休みを取ってはいけませんでした。ちょうど1977年から1978年は党の整風運動¹⁹が盛んでした。工作隊には工宣隊²⁰、貧宣隊²¹、軍宣隊²²という3つの班がありました。工作隊から休暇を取り、結婚式を挙げ、嫁ぎ先である夫の実家に行きました。

当時、アラドチラル生産大隊の下に10余の生産隊がありました。1975年にわたしを大学に入れると言っていました、行かせませんでした。生産大隊長が許可しませんでした。当時、夫とわたしは婚約しており、夫は大学入学を許可されましたが、

「彼ら2人が行ってしまうと、ここで仕事をする人がいない」

と言って、わたしは許可されませんでした。人民公社の書記もやはり許可しませんでした。

「おまえさんの生産大隊の書記はわたしにおまえさんを大学に行かせるのを許可してはいけませんと言った。」

¹⁷ 人民公社が学生を選抜・派遣して大学・中等専門学校に入学させ、卒業後は人民公社に配属させる制度。

¹⁸ 政策遂行のため現地に派遣され、短期間指導工作にあたるチーム。比較的大規模な運動の際に組織される。

¹⁹ 思想・作風を整頓すること。

²⁰ 各学校に派遣され学生の指導にあたった。

²¹ 貧は貧下中農の略。

²² 各学校・文化団体に派遣され学生や職員の指導にあたった。

と行かせませんでした。そのため、わたしは

「婦女連合会の仕事をしない」

と言って、辞めてしまいました。そのわかり、地域の人民教師（中国語で民辦教師）をするようになりました。わたしは1975年から1979年まで人民教師をしていました。当時の給料は点数を計算し、生産隊から支払われます。生産隊全体で1年の得点2800点を5で分けて、1人年間100元くれます。1980年に地域の民間教師を正規の教師にする政策ができ、わたしは試験をへて、国家事業として正式の教師になりました。人民教師をしている時、月給は31.5元でした。1980年から正式の教師になると、月給は41.5元になりました。生活はとても大変でした。しかし、わたし自身大学に行くことができず、一生の後悔になっていましたので、3人の子どもたちには何ともしっかり勉強させ、大学に行かせようと歯を食いしばってきました。子どもたちが勉強好きなら、お金を借りてでも必ず子どもたちを学校に行かせよう、と心に決めていました。今、3人の子どもたちは3人も大学を卒業して、仕事についています。

わたしの長男はチョ・ヨンシャンと言ひ、1978年生まれで、午年です。中学校はチャラスン中学校、高校はヒンガン盟ホルチン右翼前旗第一中学校、大学は吉林農業大学を卒業しました。今ヒンガン盟ホルチン右翼前旗の牧畜局で働いています。息子の嫁は金平と言ひ、1980年生まれで、申年です。ホルチン右翼前旗の緑水繁殖牧場響出身で、中学校はオブルヅルガー中学校、高校はホルチン右翼前旗第一中学校、大学は現在の通遼市にある内モンゴル民族大学を卒業しました。今はホルチン右翼前旗第五中学校で教員をしています。

長女はヨンメイと言ひ、1980年生まれで、申年です。中学校はチャラスン中学校、高校はホルチン右翼前旗第一中学校、大学は内モンゴル民族大学を卒業しました。包頭市九原区政府の公務員です。娘婿の名前はホルバルトと言ひ、1980年生まれで、申年、中学校はオラーンチャブ（烏蘭察布）盟モンゴル中学、高校は内モンゴル師範大学附属中学校、大学は内モンゴル財經学院を卒業しました。今、包頭市蒙商銀行に勤めています。

末娘はチュー・ゴワー（楚高娃）と言ひ、1982年生まれで、戌年です。中学校はチャラスン中学校を卒業しましたが、高校は卒業していません。悲しいことに、結婚してから13、14年たった時、夫が亡くなりました。ゴワーが9歳の時、夫は病気で亡くなったのです。1991年に亡くなりました。そのため、当時、生活が苦しかったのです。1人分の給料で3人の子どもを学校に行かせるのは負担が大きかったです。中学校の学費、教科書代、宿舎費、食費、暖房費すべてを負担します。1年で170余元にもなります。ゴワーは1997年に内モンゴル民族保育士学校に入り、4年勉強して卒業しました。当時、就職先の割り当てをしており、故郷に戻ってきて、保育士をしていました。しかし、ゴワーは大学を受験したいと考えていました。

「大学受験がどんなのか試してみましょう。試験に受かっても大学には行きません。働きます。」

と言って、内モンゴル師範大学を受験しました。受験に受かると、わたしの同僚と家族親戚は皆わたしに

「大学に行かせる必要はありません。あなたの生活も大変でしょう。」

と忠告しました。生活は本当に苦しかったです。当時、給料は期日より遅れて支払われます。そのため、大学の学費を払うお金がありませんでした。しかし、わたしは、他の家の子どもは大学を受験しても受かることができないのに、わたしの娘は合格したのに行かせなかったら、わたしは一生後悔する、と考え、娘を大学に行かせました。先に登録費を支払い、

「何があっても期日までに登録し、授業に遅れないように勉強しなさい。学費はお母さんが何とかして支払いますよ。」

と言って、大学に行かせました。内モンゴル師範大学を卒業後は、全部ゴワー自身で決めて、修士課程、博士課程、ポスドクを自力で終えました。子どもたちが勉強好きなら、わたしも全力で子どもたちを応援します。他の家の子どもが中央民族大学に受かったのを見て、わたしも自分の子どもがそんなに良い学校に通うことができたらどんなに良いだろうかと思っていました。ゴワーは努力し、わたしの希望を実現しました。ゴワーは中央民族大学音楽学院で音楽、芸術研究の修士課程、博士課程を終え、卒業後は中国音楽学院のポスドクを2年しました。今、中央民族大学の音楽学院で准教授をしています。ゴワーは大変な努力家です。末っ子だと甘やかしていません。しかし、ゴワーはとても穏やかで素直な性格で、思ったことを直接言います。

婿の名前はホビスカルトと言います。ヒンガン盟トシャード旗出身です。今はホルチン右翼中旗と言います。ホビスカルトは中央民族大学を卒業し、中国教育部派遣でモンゴル国に行き、ウランバートル大学で修士号を取りました。中国に戻ってきてから、中央民族大学の博士課程に入り勉強しました。卒業後、そのまま中央民族大学で教員をしています。少数民族語言文学学院の准教授です。専門はモンゴル民間文学です。

わたしは教師の仕事を1975年に得てから33年働き、2008年に定年退職しました。わたしは仕事に対してとても努力しました。旗で何度も故郷の代表に選ばれ、会議に何度も参加しました。そのなかで覚えている会議は1973年に吉林省長春市で開かれた会議です。開催期間は半月にも及びました。その会議は吉林省で開かれた第4回全国少数民族女性代表たちの大きな会議でした。チャラスンからは1人だけモンゴル人女性が代表で、旗からは21人が参加しました。そのうち、6人のモンゴル人女性と1人の朝鮮人女性が参加しました。当時、内モンゴル自治区の首席だったブへの姉のユン・ショベイ（ウランフーの長女、雲曙碧）に会いました。ユン・ショーベイは当時ジリム（哲里木）盟女性連合長でした。会議が終わる時に、千余りの人と一緒に写真を撮りました。その記念写真をパノラマで撮りました。その記念写真はわたしのところがありません。その大きな会議は1973年の夏に開かれました。当時わたしたちは吉林省白城市に属していたので、わたしは吉林省代表として参加しまし

た。白城市をモンゴル語でシャージガイ市と言います。

わたしが退職するとき、ちょうど孫が生まれました。わたしの息子には2人の子どもがいます。わたしには家はなく、息子と一緒に住んでいて、その孫たち2人ともわたしが面倒をみました。下の子が4歳になり幼稚園に入るときに、包頭市にいる娘に孫が生まれました。2009年です。さらに下の子が2013年に生まれました。それで、わたしは今、包頭市にいる娘のところに住んで、孫たちの世話をしています。ゴワーにはまだ子どもがいないので、早く北京に来て孫の世話をしたいと思っています。

聞き取り日時：2021年2月22日、2021年8月18日（電話）

聞き手：サランゲレル

場所：中国北京市ゴワー自宅

謝辞

本研究は JSPS 科研費 17K03274 の助成を受けました。オユンゲレルさんに心よりお礼を申し上げます。

引用文献

スチンバト、サランゴワ訳（2011）「ホールチの類型とウリゲルの説唱伝統」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』13: 77-94.

フスレ（2011）「内モンゴルにおける中国共産党政権の確立と強化—東モンゴル地域における「土地改革」の展開を中心に」『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策：1945-49年：民族主義運動と国家建設との相克』風響社, 253-300頁.

（さらんげれる・中央民族大学中国少数民族語言文学学院／

こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

An oral history of urban Mongolian woman in China (4) Ms. Oyungerel

Sarengerile and Kanako KODAMA

Summary:

Ms. Oyungerel came to Beijing in February 2021 to spend Chinese New Year at the home of her daughter and son-in-law, Mr. and Mrs. Gowaa, who are professors at the Minzu University of China. When Sarengerile visited Ms. Oyungerel's daughter and son-in-law's house to ask about her oral history on the appointed day, Sarengerile was greeted with a smile by a beautiful Mongolian lady, thin and white, with neat teeth and pitch-black hair. Ms. Oyungerel is from Boruhushuu Village, Charasun Township Khorchin Right Wing Front Banner, Hinggan League, Inner Mongolia, China. She was a teacher at the Charasun Primary School of the Front Banner and retired in 2008. Ms. Oyungerel's family were all ancestral folk artists, *uligerchi* who chant *uliger* (folk stories) and *huurchi* who perform *huurin uliger* (folk stories accompanied by the *siqin*, a four-stringed bowed instruments), and Ms. Oyungerel's father was a nonprofessional *huurchi*. The uncles on her father's side were also *huurchi* or *uligerchi*. Ms. Oyungerel herself was interested in *huurin uliger*, so she used to listen to *huurin uliger* every day.

Ms. Oyungerel is an ordinary, level-headed mother who understands a schoolteacher's spirit, attitude, and responsibility. Not only could she "saddle a horse and put her foot in the stirrups (this means to raise children well.)", she could also take care of her grandchildren. She did not consider it a hassle to take care of her grandchildren; instead, she considered it a blessing and said many times, "Now I am happy". This life history of Ms. Oyungerel is not the personal history of one person, but a reflection of the history of the society, and describes a very challenging life experience. If the young people in China today heard that Ms. Oyungerel worked for a year and was paid only 30 or 40 yuan a month and was given porridge and corn *boob* (cake, steamed cake) to share from the communal dining hall, they would think it was a story from a fairy tale. This life history reflects the difficult social and cultural history of the region and the modern history of the nation.